

最優秀賞

父と私

鹿児島県立喜界高等学校 1年 喜禎 あさひ

蒸し蒸しと汗ばむ梅雨の頃、今期最後の蒸留を終えた蔵の中は、生まれたての焼酎の香りで熱気に満ちていた。

「いい香りだね。この香りをどう思う。」

蔵に入る度に父からかけられる数々の言葉は、幼い頃から私の胸を高鳴らせ、様々な想像を膨らませてくれた。そして、今年、十六歳の夏、久しぶりに入った蔵の中で、私は、これまでとは違う想いの中にいた。

私の家は黒糖焼酎の造り酒屋だ。大正五年創業、今年で百六年を迎える黒糖焼酎の中では最古の蔵だ。小さい頃は、父の後ろに付いてよく蔵に入った。時には、友達と一緒に見学をし、友達が珍しがって父に質問をする様子に胸を弾ませ、時には、全国から訪れる見学の方達に同行し、焼酎を熱く語り合う姿に興奮した。

こうして、いつも焼酎の側で育ってきた私は、深く意識はしなくとも、自らのあるべき道を感じてきた。また、一人娘ということもあり、周囲からも度々「後継ぎ」という言葉をかけられた。ただ、歳を重ねるに連れ、私の中に焼酎とは別の道が描かれ、心は大きく揺れ始めた。百年以上繋いだ歴史、造りの技術、黒糖焼酎蔵の中では、唯一オーガニックで原料のサトウキビ栽

培を手掛けるという取り組み。高祖父から四代目の父まで、脈々と受け継がれてきた蔵の未来が頭を巡る。

「自分の選んだ道を行けばいいよ。」

父はそう言う。私の気持ちを察しているのかもしれない。安堵と戸惑いが私の胸をつく。焼酎造りに対する父の想いは十分に私に繋がっている。私が継ぐと言えば、父は心の底からホッとした表情を見せるだろう。人生は一度きりだ。だから私は考える。自分の望む道を描きつつ、蔵の歴史を繋いでいく最良の方法を。そう、それぞれに想いがあるからこそ、「繋ぐ」ということの難しさをつくづく感じた、十六歳の夏だった。

（審査評） 家族間の視点を通して、地域・伝統・歴史とあらゆるものを繋いでいこうとする決意と迷いが臨場感溢れる作品。率直で素直な人間性を感じられる。文章としては読点の使いかたが秀逸。導入時は読点を多く使うことで、自身の置かれている環境や酒蔵の歴史をじっくりと読ませている。後半は読点が減ることで、父娘それぞれの想いや決意がスピード感を持ってダイナミックに伝わってくる。斬新かつ効果的な技法だと感じた。

佐藤 暁哉